

アジア太平洋戦争期朝鮮総督府における 満洲移民宣伝活動

権力*

gongzuokuang90@yahoo.co.jp

<目次>

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 3. 朝鮮総督府の移民宣伝と朝鮮人移民の生活 |
| 2. 朝鮮総督府における朝鮮人満洲移民宣伝活動 | 実態との乖離 |
| | 4. おわりに |

主題語: 朝鮮総督府(Government General of Chosen)、満洲移民(Manchurian immigration)、移民宣伝(immigration Propaganda)、労働力収奪(labor plunder)、過大宣伝(over-promotion)

1. はじめに

本稿の目的は、アジア太平洋戦時期日本の労働力再配置という背景の中で、朝鮮の農村人口問題と「満洲国」からの食糧増産を目的として進行した朝鮮人満洲移民政策を検討する。詳しくは、この政策の一環である移民宣伝の過程や宣伝内容の真偽、そして移民計画によって現れた問題点と解決策を考察することである。

満洲の朝鮮人移民は19世紀後半から増加傾向を辿っていった。清朝末期の1860年代から朝鮮人が鴨緑江と豆満江を渡って満洲に移住し、1931年「満洲事変」まで、満洲の朝鮮人の人口は60万人に増加していた¹⁾。

「満洲事変」の発生と「満洲国」建国(1932年3月)と共に、朝鮮総督府は「鮮人移民会社設立計画案」を作成し、朝鮮農村人口過剰問題を解決するための好機と捉えた。しかし、関東軍は朝鮮人を移住させるよりも、日本人を移住させることを優先し、「反日活動」に対する警戒から朝鮮人満洲移民計画に対して反対したのである。一方、日本政府は、朝鮮人の日本への渡航を阻止するための方策として、朝鮮人満洲移民政策を支持した。

* 一橋大学大学院社会学研究科 博士課程

1) 孫春日(2009)『中国朝鮮族移民史』北京、中華書局、405頁

1937年に日中戦争が勃発し、日本「内地」の人口過剰問題は消滅し、深刻な労働力不足に陥っていた。「内地」の日本人をさらに募集して満洲に送ることが困難である現状で、関東軍は、従来の立場を覆し、朝鮮人満洲移民を積極的に推進する立場をもつようになった。1938年以降、朝鮮総督府は日本政府と関東軍の合意のもとに、朝鮮人満洲移民活動が本格的に展開していったのである。

移民政策の具体像に迫るために、朝鮮総督府が移民政策を円滑に推進するためにいかなる宣伝活動を行ったのかについて明らかにする。ついで、移民政策の実施過程で台頭した「定着」問題に対して、朝鮮総督府がいかなる解決策を打ち出したのかについて明らかにする、また、朝鮮総督府の移民募集宣伝の一部である衛生医療施設の宣伝内容の検討を含めて、従来の朝鮮人移民生活史研究のなかで、検討不足である朝鮮人移民部落の医療衛生状況について解明する。したがって、本研究では、朝鮮人満洲移民政策史と満洲朝鮮人移民の生活史の二つの研究動向に則して検討する。

朝鮮人満洲移民政策に関する研究は、これまで多くなされてきた。依田²⁾は朝鮮人移民の過程を述べ、移民の農業生産を中心に置く。玄³⁾は朝鮮人の満洲移住の方式、過程を整理した。しかし、彼らの研究は移民通史であり、2000年以降の研究は、彼らの成果を踏まえて移民過程の詳細な分析へと進んでいった。

本研究が対象とする朝鮮総督府の移民政策に関して、分析を行ったのは金永哲⁴⁾である。金は朝鮮人満洲移民政策の目的、在満朝鮮人社会に対する影響、移民機関の性格や目的、移民に対する政府指導に基づき、朝鮮人満洲移民政策の過程を「満洲事変」期(1931-1932)、移民統制政策の成立期(1932-1936)、変遷期(1936-1940)、衰退期(1940-1945)という時代区分を行った。その上で、金は1940年から朝鮮人満洲移民政策が転換された経緯を論じた。戦時期日本への労務動員、朝鮮内の労働力不足の背景の下、朝鮮人満洲移民政策が資質優良の移民の計画的な送出へと転換していったという。

朝鮮人移民の生活状況に関する研究はこれまで土地制度や農業などを中心として多くの研究成果が出されてきた。孫⁵⁾は「満洲国」期の土地制度を中心に、在満朝鮮人の土地保有状況を明確にした。衣⁶⁾は1900年代から1920年代の在満朝鮮人の耕作問題、特に水田問題に着目して、朝鮮人の満洲農業開拓を論じた。金⁷⁾は満洲地域の水田耕作と朝鮮人の満

2) 依田憲家(1976)『満洲における朝鮮人移民』『日本帝国主義下の満洲移民』満洲移民史研究会

3) 玄奎煥(1967)『韓国流移民史 上』語文閣

4) 金永哲(2012)『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂

5) 孫春日(2000)『解放前東北朝鮮族土地関係史研究』吉林人民出版社(長春)

6) 衣保中(1999)『朝鮮移民と東北地域の水田開発』長春出版社

洲移住に関連づけている。朴⁸⁾の研究は朝鮮人農業移民の生活実態を注目して、日本帝国主義の勢力拡張と支配について論述した。また、柳弼久⁹⁾は満洲の間島地域で発行された『在満朝鮮人通信』という雑誌を用い、親日在満朝鮮人による宣伝を叙述した。しかし、柳の重視する点は、満洲の朝鮮人に対する移民宣伝内容にあり、朝鮮内への宣伝の活動や内容には触れることはなかった。つまり、満洲への移住後における在満洲朝鮮人への宣伝がどのような影響を及ぼしたかまでは明らかにしたもの、満洲への移住前における朝鮮内に居住する朝鮮人への宣伝という点は未だ不明瞭だと言える。

以上の先行研究の検討を踏まえ、本稿では次の課題を設定しつつ解決する。第一、朝鮮人満洲移民計画の実施段階である1939年から1943年までを対象に置いて、朝鮮内にむけた朝鮮総督府や朝鮮移住協会による募集宣伝について検討する。次に、朝鮮人満洲移民の生活実態に関する研究の一環として、朝鮮人満洲移民の農業経営と衛生医療の実態について検討する。この作業は、移民事業に関する宣伝内容と実態の照合を行うためにも必要な作業となる。

本稿では、韓国国家記録院所蔵の行政文書、東洋文庫アジア歴史史料センター所蔵の日本内閣資料、満洲国関連史料である『満洲国開拓年鑑』など、史料を利用する。これらの資料を利用することにより、朝鮮人満洲移民活動の全体像が把握できる。加えて、満洲移民を経験した朝鮮人の回顧録や当時の新聞資料を用いて、当該時期において朝鮮人満洲移民の生活実態がより具体的かつ立体的に把握できる。

2. 朝鮮総督府における朝鮮人満洲移民宣伝活動

2.1 「本格移民期」(1939～44年)における朝鮮人満洲移民活動

まず、朝鮮総督府が朝鮮人満洲移民活動を推進するために、朝鮮内で行った朝鮮人募集活動の内容を確認する。1938年に発表した「朝鮮総督府対満鮮農移住要綱」で毎年一万戸、総計五万人の朝鮮人を満洲に送ろうと決定した¹⁰⁾。1939年から、朝鮮総督府は朝鮮内から

7) 金穎(2007)『近代東北地域水田農業発展史研究』中国社会科学出版社

8) 朴敬玉(2015)『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶ノ水書房

9) 柳弼久(2016)「1930年代中後半日帝の満洲開拓民政策に対する親日在満韓人の宣伝」『韓国学論叢』45

10) 「朝鮮総督府対満鮮農移住要綱」『朝鮮経済年報』昭和14年版、1939年、374頁

満洲に移民志向がある朝鮮人を募集し始めた。また、「朝鮮総督府対満鮮農移住要綱」で、移民者募集内容を明確に規定した¹¹⁾。この要綱は、朝鮮総督府が各道に対する移民者数の割り当てを規定しており、移民者の実際の募集は各道庁において進めるものと規定している。

1940年における『毎日新報』の記事からは、朝鮮人移民募集の過程を垣間見ることができる。<表1-1>は朝鮮人満洲開拓民事務会議から始まる移民募集に向けた動向を一覧にしたものである。

<表1-1> 1940年朝鮮人満洲開拓民事務会議状況表

会議名称	会議内容	会議者	会議日時
開拓民事務会議	1940年度開拓民移住関連事務	朝鮮総督府外事部、「満洲国」、満鉄、鮮鉄、鮮満拓殖関係者	1940.2.16、17
全羅南北道開拓民事務担任者会議	移住に関する事務連絡	—	1940.2.26
忠清南北道開拓民事務担任者会議	移住に関する事務連絡	—	1940.2.28
慶尚南北道開拓民事務担任者会議	移住に関する事務連絡	慶南24名、慶北28名	1940.3.1
開拓民関係者会議	開拓民助成金増額	朝鮮総督府、鮮満拓殖、「満洲国」開拓総局	1940.8.7

出典：『毎日新報』「開拓民輸送次事務打合会開催」1940年2月14日、「開拓民事務担任者会議」3月5日、「助成金を増額し開拓民を厚待する」8月9日付より作成。

1940年2月16、17日、朝鮮総督府と「満洲国」政府、南満洲鉄道株式会社(以下、満鉄)、朝鮮総督府鉄道局(以下、鮮鉄)、鮮満拓殖会社の関係者らは開拓民事務会議を開き、1940年度の移民関連事務を討論したとされる¹²⁾。またこの会議の後、全羅南北道、忠清南北道、慶尚南北道では開拓民事務担当者会議が行われている。『毎日新報』1940年2月14日の記事では、朝鮮総督府は「明年度開拓民の使命に関して、趣旨徹底と事務統括、次の日程に南鮮各道から開拓民事務担当者会議を開き、総督府満洲国関係者も出席すること」としているのが確認できる¹³⁾。すなわち、朝鮮総督府から指示を受けて、実際に移民業務を担当したのは

11) 同上、375頁

12) 「開拓民輸送次事務打合会開催」『毎日新報』1940年2月14日付

各道の移民事務担当者であった。各道では開拓民事務担当者会議を開き、朝鮮総督府から分配された朝鮮人満洲移民の募集数を道内の府、郡まで再分配することを決定した。移民者募集数は各郡にまで分配されたが、朝鮮人満洲移民活動は行政区分にしがたい体系的に推進された¹⁴⁾。

朝鮮総督府は1939年の「朝鮮総督府対満鮮農移住要綱」で集団移民¹⁵⁾募集における各道別の担当数を割当てた。忠清北道15%・450戸、忠清南道10%・300戸、全羅北道20%・600戸、全羅南道15%・450戸、慶尚北道25%・750戸、慶尚南道10%・300戸、江原道5%・150戸(%)は割当率で総計100%)であった。朝鮮人満洲集団移民募集の割当ては、朝鮮南部地域で道別に振り分けられた。1939年の朝鮮人満洲集団移民募集の目標3,000戸中、慶尚北道が750戸と最も多く、最も少ない江原道では150戸を募集する必要があった。

移民者募集に対する内容は、慶尚南道における朝鮮人満洲移民者の内容から確認できる¹⁶⁾。その内容をみると、1940年度慶尚南道から北満地域まで入植した移民は総計705戸であった。この705戸の移民を募集するために、慶尚南道当局では、各府、郡において移民を募集し、移住させたとある。ここで注目すべき内容は、募集期間である。2月27日前後から開拓民の選定を行い、早くも3月12日から4月上旬までには「輸送」を行っている。

これほど短期間に705戸の移民を募集し「開拓民の選定」、「輸送」を行ったのは、各郡の朝鮮人動員システムにその原因がある。朝鮮人満洲移民の募集もこの動員システムを利用して募集を進行したものと推測される。すなわち、朝鮮総督府は、朝鮮農村地域にある程度の動員力を持っているために、短期間に移民者募集の決定を指示することができたと推測できるのである。

朝鮮総督府は、朝鮮総督府 朝鮮南部各道 各道の府、郡にいたる移民募集の経路を作った。しかし、制度的な募集システムを利用したが、順調には進まなかった。移民募集制度が立てられたにもかかわらず、募集が想定通りにいかなかったのか。その原因を見て

13) 同上。

14) 「忠清南道では、各郡の関係者を召集して、今年の春に入植する開拓民は120戸と決定し、公州で30戸、保寧で50戸、舒川で40戸を募集する」「開拓民百廿戸各郡割当決定」『毎日新報』1943年2月22日付

15) 1939年の「朝鮮総督府対満鮮農移住要綱」の中では、朝鮮人国策移民を集団、集合、分散移民と分けている。この三つの種類の移民形態は全て朝鮮総督府から斡旋、移住したが、集団移民は移住した後鮮満拓殖会社から管理し、集合移民は移住した地方金融会から管理した。分散移民は移住費用、移住土地などは一切自分から準備し、鮮満拓殖や地方金融会は関与していなかった。

16) 【釜山】大陸開拓の戦士として、今年度、慶南から北満に入植する開拓民は、集団開拓民四百四十戸、集合開拓民二百六十五戸、合計七百五戸に決定し、道当局では、目下各府郡にさせて、開拓戦士の選定を急いでいるが、来三月十二日から四月上旬まで、集団開拓民本隊を先陣として、各各輸送することになった。「開拓戦士七百五戸慶南から北満に入植」『毎日新報』1940年2月27日付

いくため、まず移民者募集の計画と実績はどうだったのかを明らかにしよう。<表1-2>からは、1939年から1941年までの朝鮮人満洲移民の数が把握できる。

<表1-2> 1939年-1941年朝鮮人開拓民年間入植統計表

単位：戸

入植年度	集団	集合	分散	総計
1939年	588	4,971	3,181	8,740
1940年	2,725	1,305	2,400	6,429
1941年	1,095	141	1,969	3,305

出典：金永哲(2012)『満洲国期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、285頁、原史料は『朝鮮人開拓民入植統計表 康徳11年6月末現在』。

朝鮮人満洲移民活動が始まった1939年から1941年まで、朝鮮人満洲移民の実績は1938年に立てた年間一万戸の移民計画には満たなかったことがわかる。特に、1941年の移民数は1940年のそれに比べて半分にしかならず、1941年の朝鮮人満洲移民計画を見ると「[集団開拓民は、康徳]八年度にも黒河、北安両省に亘り三千戸を入植の予定である」¹⁷⁾といわれたように、1941年度も集団移民として、朝鮮から三千戸を募集する予定である。しかし、<表1-2>から確認すると、1941年度の集団移民の実績は1,095戸であり、朝鮮人募集の予定計画は想定通りできなかった。

朝鮮人満洲移民の人数が減った理由として、1940年の慶尚南道の移民者募集と送出の過程で大事件が生じたためであると考えられる。慶尚南道の移民募集と送出の過程で30戸の農民を「満洲開拓民」の名義で募集したにもかかわらず、実際には「北鮮開拓民」として、朝鮮北部地域に送り出してしまったのである。この事件が発生した後、朝鮮総督府の調査報告によると、慶尚南道当局の「北鮮」開拓と満洲開拓に対する認識が乏しく、農民に対して、実情を欺瞞したとされる。道当局から指示される移民数の目標を達成するため、北鮮移民も満洲移民の名義で募集した¹⁸⁾。このことから、移民担当者に対する満洲認識の普及も移民推進に対して必要性があったとされている。

朝鮮人満洲移民が減少したもう一つの原因は、日中戦争の長期化とともに、朝鮮農村の過剰人口が日本「内地」の労務動員計画および朝鮮内の鉱工業、農産物増産計画などに大量吸収、動員されたことにある¹⁹⁾。朝鮮農村の労働力は過剰状態から不足状態に変化して、朝

17) 満洲国通信社(1941)『満洲開拓年鑑・康徳八年』、277頁

18) 「満洲と北鮮の区別を忘れた 開拓民指導の失敗」『釜山日報』1940年4月3日付

鮮人満洲移民の募集も困難になった。当時の新聞記事²⁰⁾を確認した結果、1940年度の朝鮮人満洲移民計画のなかで、分散移民の計画は6000戸であったが、5月10日まで移住募集者は1871戸であったことを確認できる。また、1940年度の朝鮮人満洲移民実績を確認すると、分散移民は2410戸であった²¹⁾。すなわち、1940年度の分散移民実績は計画の半分のみであった。このように、朝鮮人満洲移民政策は計画通りに進まなかったのである。

2.2 朝鮮人満洲移民募集の問題に対する朝鮮総督府の満洲現地調査

朝鮮人満洲視察団の満洲移民部落に対する認識

朝鮮総督府による朝鮮人満洲移民活動は南部地域で行なわれたが、想定通りの実績を得られなかった。その原因がどこにあったのかである。前提として植民地権力側の政策に原因があったと言えるが、そのような見方はあまりにも一面的である。朝鮮農民側が満洲移民活動をどのように捉えていたのかという点が考慮されないからである。したがって、ここでは朝鮮農民と満洲移民活動の関係を見ていくことにする。

まず、かかる時期における朝鮮人の満洲認識を確認しよう。朝鮮総督府が派遣した満洲朝鮮人部落視察団の記事からは朝鮮人の満洲認識が伺える。1942年6月、朝鮮総督府外事部は柳致眞、張赫宙などの朝鮮人作家を組織して、満洲に派遣した。彼らは朝鮮総督府の嘱託として、満洲を1ヶ月ほど視察した。視察の目的は、満洲朝鮮人部落の「建設の熱情と決意を半島に紹介し、雄健と創造的国民文学を建設²²⁾」することであり、視察の内容は『毎日新報』に「開拓と希望 満洲開拓地を見て」というタイトルで掲載された。記事の内容は、柳致眞の満洲朝鮮人部落の見聞と「満洲国」開拓総局との開拓座談会の談話であった。そこには、視察団が満洲朝鮮人部落の治安問題、収入問題、住宅、衛生問題に対して関心を持っていたことが書かれている。

治安問題に関して柳致眞は「この団の西原団長(恵専[恵化専門学校]出身)だそうで、最近の治安はどうかと聞くと、盗賊(共産系統)がちよつというようではあるが、最近の盗賊は決して人命を害さないし、食料など奪い取っても代償を払うというのだ」と記事の中で述べている²³⁾。ここからは1942年6月に満洲朝鮮人部落の周辺に社会主義系の独立運動団体で

19) 前掲『満洲国期における朝鮮人満洲移民政策』、287頁

20) 「今年朝鮮内から満洲に移住させる分散開拓民の戸数は六千戸であるが、10日現在の分散開拓民の申込戸数は1871戸にすぎない」『毎日新報』1940年5月14日付

21) 満洲拓殖公社『満洲開拓月報』1942年7月、5頁

22) 「開拓村文筆訪問」『毎日新報』1942年6月2日付

ある東北抗日連軍が潜んでおり、抗日連軍の厳格な秩序を見るが、満洲の治安については安心できないという心情がうかがえる。また、朝鮮人満洲移民の収入問題について柳は、「旱田4町歩で1家庭が1年に生計を立てられるだろうか?」「年収入はどれほどだろうか」「この収入では農耕費を除いて、さらに、牛馬まで育て(牛馬も相当に[エサを]食べるという)、そして1家族の1年の生計を営むことはできないだろう。加えて、朝鮮より物価が高い満洲であるためだ」と疑問を投げかけている。年収、生計、物価などへの疑問は、満洲に移住した後の朝鮮人の生活に対する憂慮とも言えるだろう。また、記事からは住宅や衛生問題に対する関心を持っていたことも見られる。

このように視察団の朝鮮人は治安問題、収入問題、住宅や衛生問題に関心を寄せていた。しかしそれは、移民後の暮らしが現在の暮らしよりも良いのか、悪いのかを判断するための関心でしかなかった。このような朝鮮人の満洲認識は、朝鮮総督府の移民政策のなかで作られたものであった。

朝鮮総督府が1939年末に作成した「朝鮮人満洲移住の件」では、朝鮮人の満洲認識を変容させる内容が含まれていた²⁴⁾。移民目標数となる1万戸を達成するためにはこの作業が必須だと認識されていたのである。そして朝鮮人満洲移民視察団や満洲開拓部落慰問団として朝鮮人を満洲へ派遣し、「良い満洲認識」を持たせた上でそれを宣伝しようとしたのである。つまり、視察団、慰問団の役割は、派遣された満洲朝鮮人移民部落を現地調査することに加え、満洲朝鮮人部落の情報を朝鮮内の新聞、座談会などを通じて、朝鮮人に宣伝することにあった。

朝鮮の満洲移民視察団活動

朝鮮総督府による朝鮮人の満洲移民視察団の派遣には、朝鮮人の満洲に対する認識を改めるという目的があった。朝鮮総督府はいかにしてそれを達しようとしたのか。

1941年から朝鮮総督府は満洲現地視察団を組織していった。<表2-1>は朝鮮総督府が組織した満洲移民視察団とその参加人数、視察地域、視察期間をまとめたものである。

23) 「開拓と希望 満洲開拓地を見て【四】」『毎日新報』1942年8月2日付

24) 前掲『満洲国期における朝鮮人満洲移民政策』、252頁

<表2-1> 満洲移民視察団状況表

視察団名称	参加者	視察地域	視察時間
開拓民営農視察団	忠清北道各郡属と面長32名	間島省親和団	1941.6.6-1941.6.20
全南視察団	全羅南道各郡属と面長11名	北安省第一、第二開拓部落	1942.2.2-1942.2.17
満洲医療視察団	京城医療専門学校教授6名	龍鎮、北安	1942.7.20-1942.8.11
慶南視察団	慶南光山主事	北安第一団、第二団	1941年、3週間
開拓民調査隊	朝鮮総督府外事部	満洲朝鮮人部落	1942年10月下旬から2ヶ月

出典：『毎日新報』「開拓民営農視察団忠北道から派遣」1941年6月8日、「光山慶南主事満洲開拓地視察談」12月25日、「開拓民の入植地全羅南道で面長らが予め視察」1942年2月3日、「全南視察団が新京到着」1942年2月3日、「開拓民を保護しよう 寒心な住宅と飲食」8月14日、「開拓民指導万全満洲に調査隊派遣」10月25日付より作成。

備考：満洲移民視察団が設置された日付は確認できていない。

<表2-1>から分かることは、忠清北道、全羅南道、慶尚南道で視察団が組織され、派遣されていることである。また、京城からも医療視察団が組織されており、開拓民事務担当者会議が行われていない地域からも派遣されたということである。特に、朝鮮人の満洲移民計画が測頭調に進まないなか、朝鮮総督府拓務課は朝鮮内の各道から送った視察訪問団を積極的に奨励し、視察活動に力を入れた²⁵⁾。

次に、視察団の構成員を見てみよう。視察団の構成員を確認できれば、朝鮮総督府が視察団を積極的に奨励した意味を汲み取れる。全羅南道で組織された視察団について『毎日新報』の記事²⁶⁾から確認できる。確認した結果、全羅南道から派遣した視察団の団員は全羅南道の勸業課長と面長だった。前文で見たように、道当局の職員と面長は朝鮮人満洲移民活動のなかで移民者を募集する役割を担っていた。また、朝鮮総督府は朝鮮人満洲移民の募集人数を各道に分配し、各道から郡、面までひろげた募集システムであった。直接の担当者として、各道の職員と郡、面のリーダーなどが朝鮮人の満洲認識を改めさせ、「安心」と「励み」を与えようと視察団を組織・派遣したことがわかる。これは、朝鮮総督府が視察団を積極的に奨励した所以である。

視察団の組織・派遣は、朝鮮総督府による宣伝活動の一方法であった。その他の宣伝方

25) 「開拓民の入植地全羅南道で面長らが予め視察」『毎日新報』1942年2月3日付

26) 同上

法によっても朝鮮人の満洲移民募集が行われたが、朝鮮総督府外事部が担った満洲移民地巡回慰問公演活動はそのなかでも特に規模が大きなものであった。この活動の経過と中身を確認していこう。

満洲移民部落巡回慰問団活動

「満洲国」建国10周年を慶祝するため、朝鮮総督府は大規模な満洲移民者部落巡回慰問公演活動を行った。この巡回慰問公演は、1942年8月から開始して9月末に完了した²⁷⁾。巡回慰問団は、朝鮮総督府が朝鮮人文芸者を動員して組織された。活動の時間と動員された人数からして、この巡回慰問公演は朝鮮総督府が進めた最大規模の宣伝活動であった。ここでは、巡回慰問講演の内容から朝鮮総督府の政策意図を検討する。

1941年11月3日、「満洲国」開拓総局は朝鮮開拓民文化懇談会を設置した。同会は朝鮮人満洲移民の文化生活の向上を図るために設置されたものであった。以下、同会に関する『毎日新報』の記事を確認しておく。

【新京支社発】文化と娯楽を持つ機会が少ない開拓民たちを慰めて、彼らが文化の向上を積極的に果たすために、今年の春に開拓総局の伊原相弼参事官と奉天にいる尹白南氏を中心として、組織された朝鮮人開拓民文化向上会は、すでに全満洲に散在している朝鮮人開拓民に対するはじめに慰問事業として、満映に依頼して、四班の映画班を9月4日から派遣巡回中にあるが、今回の事業を実施する中心として、一層機構を拡充する必要を感じた。これの恒久な組織を作る同時に、経費も満拓と他の関係機関から毎年約二万円の補助を得るとして、先の28日に、開拓総局及び関係者一同が新京市内の鶏林分会で会議した結果、会議名称を朝鮮開拓民文化懇談会と改称し、各役員を以下のように決定した。

名前	役職	機構
伊原相弼	委員長	開拓総局
田中実稲	委員	協和会中央本部
美濃谷善三郎	委員	弘報処
原口貢	委員	大使館朝鮮課
林漢龍	委員	満拓
伊藤義	委員	満映
李性在	委員	満鮮日報

27) 「土の勇士に絢爛な膳物」『毎日新報』1942年8月16日付

[中略]

したがって、事務所はしばらく開拓総局の第2課に置いて、主管官庁である開拓総局の指導のもと、朝鮮内の移住協会と手を握って、積極的に在満朝鮮人開拓民に対する文化工作を開始することになった。

そして、その会は文字通り定期的と臨時的に懇談会を開き、下と同じ事業を実施する。

1. 講談、映画、演劇などを通じて開拓民を慰安教化。
2. 巡回談話及び刊行物などを通じて開拓民の啓蒙教化。
3. 開拓民文化の向上に関する調査研究²⁸⁾。

朝鮮開拓民文化懇談会は朝鮮人満洲移民の文化向上を目的として文化工作を行なう組織であったことがわかる。このような組織を作り、恒久的な組織に発展させようとした動向には、在満朝鮮人の文化生活が貧弱という認識が前提にあった。朝鮮人の文化を向上させることで、朝鮮人満洲移民活動が円滑に進むと目論んだのであろう。

また同記事からは、朝鮮開拓民文化懇談会の活動にあたって朝鮮移住協会の参加と協力があつたことがわかり、この点は非常に興味深い。懇談会の主管官庁は「満洲国」の開拓総局であったが、朝鮮総督府の影響下にあつた移民推進機構たる朝鮮移住協会までもが加わっていることから、まさに朝鮮人満洲移民活動における一大キャンペーンであった。

この一大キャンペーンの中心的な活動として行われたのが、満洲朝鮮人移民部落巡回公演であった。前述のように、「満洲国」建国10周年の契機として朝鮮総督府は大規模的な慰問団を組織した²⁹⁾。慰問団には、当該時期における朝鮮演芸界の活躍人物が多く含まれていたことが下記のリストから確認できる。鄭大澤、金用女、鄭英淑、趙相鮮、林素香、李福本、宋伴善、白年雪、張世貞、金永沢、韓英順、崔明衡、鄭彩蘭、高俊成、李弄珠などが含まれていた³⁰⁾。このなかで、趙相鮮、林素香はラジオ放送で出ている歌手で、李福本は朝鮮楽劇団に所属していた。

このように構成された慰問団は1942年8月に満洲にて慰問活動、移民地域視察、懇談会といった活動を行った。慰問団は2つの班に分け、それぞれ北満洲、東満洲地域に移住している朝鮮人部落で巡回公演を開いた。2班は北満洲を中心に嫩江、北安等地域にある朝鮮人部落を、1班は東満洲を中心に間島地域にある朝鮮人部落を巡回したという³¹⁾。ただし、巡回

28) 「開拓戦士に文化 在満有志懇談会組織」『毎日新報』1941年10月3日付

29) 「土の勇士に絢爛な膳物」『毎日新報』1942年8月16日付

30) 同上

31) 同。

したすべての朝鮮人部落は、朝鮮総督府の移民政策を通じて建設された「集団部落」であった。したがって、朝鮮総督府の政策によらずに満洲へ移った朝鮮人移民たちによる部落は、巡回の範囲に含まれなかった。その原因については後述する。

慰問団の活動情報は『毎日新報』にて紹介されていた。『毎日新報』の掲載内容を整理すると<表2-2>のようになる。

<表2-2> 慰問団第1班の公演内容

順番	内容	演目名	出演者名
1	合唱	愛国行進曲 ³²⁾	全員
2	独唱	千里遠程	金用女
3	独唱	海夢	李圭南
4	独唱	黄昏牧歌	李福本
5	舞踊	僧舞	韓英順
6	合唱	夫婦	李福本、金用女
7	独唱	志願兵行進曲	鄭大沢
8	独唱	春香歌	林素香
9	独唱	沈清歌	趙相鮮
10	舞踊	鉢羅舞	韓英順
11	寸劇	丈人号令	李福本、李圭南、金用女
12	唱劇	春香埽	趙相鮮、林素香

出典：『毎日新報』「土の勇士に絢爛な膳物」1942年8月16日付より作成。

慰問公演の演目を見ると、日本軍歌である「志願兵行進曲」といった皇国思想に基づいた曲や劇で占められていることがわかる。朝鮮人を皇国臣民化させるため朝鮮総督府が慰問講演を重視した姿勢が見えてくる。

前記した柳致眞の報告では、朝鮮人部落の周辺で抗日連軍が活動していたことを確認した。この時、関東軍は朝鮮人移民が満洲の「不逞鮮人」の影響を受けて抗日運動に参加することを恐れ³³⁾、朝鮮総督府の移民政策に反対していた。そのような反対を受けても朝鮮人を満洲へと送出したかった朝鮮総督府は、慰問団派遣を通じて在満朝鮮人の思想を教化す

32) 歌謡曲の曲名。森川幸雄作詞、瀬戸口藤吉作曲。昭和一二年(一九三七)、内閣情報部が募集した愛国歌の当選作品。翌年大流行し、第二次大戦終結まで盛んに歌われた。『日本国語大辞典 第二版』小学館、2000~2002年(ジャパンナレッジ<https://japanknowledge.com/>より閲覧、2019年12月29日検索)。

33) 前掲「満洲国期朝鮮人の満洲移民と鮮満拓殖」『東北亜歴史農村』、50頁

ることによって、関東軍との調和をはかろうとしたのである。

次に、慰問団の活動過程について確認する。『毎日新報』から慰問団の活動過程を詳しく知ることができる。〈表2-3〉はその過程を一覧にしたものである。

〈表2-3〉 開拓民慰問団慰問過程表

日程	内容
1942.8.20	開拓民を慰めるために、朝鮮移住協会と満洲文化懇談会が主催する満洲移民地巡回慰問団を送る。19日に結団式を挙行了した。総督府外事部拓務課長が発言した。結団式の後、朝鮮神宮を参拝して出発した。
1942.8.22	満洲移民地巡回慰問団第1班が満浦で初公演
1942.8.23	第1班が通化三源浦で初公演
1942.8.24	第2班が柏根里第1団で初公演
1942.8.25	第2班が柏根里第2団で初公演
1942.8.26	第2班が柏根里第3団で初公演
1942.8.28	第2班が固固河で初公演
1942.9.3	第2班が忠慶開拓団で初公演
1942.9.4	第2班が朝陽開拓団で初公演
1942.9.8	第1班、第2班が新京で初公演
1942.9.15	第1班、第2班が京城で初公演

出典：『毎日新報』「開拓の勇士のため責務を尽くすことを宣誓」1942年8月20日、「開拓民慰問第一班 新京に無事到着」8月23日、「開拓民移民演芸隊新京で一、二班合同大公演」9月2日、「凱旋な開拓民慰問隊満洲建国慶祝公演」9月13日付より作成。

慰問団の第1班は東満洲の間島地域にある朝鮮人移民部落を、第2班は北満洲にある朝鮮人移民部落を重点に巡回した。つまり、国策移民部落を中心に巡回公演を行なったのである。慰問団は朝鮮人移民の文化生活のために行なわれたのではなく、朝鮮総督府の政策的思惑が絡んでいた。巡回慰問講演の目的は、『毎日新報』という媒体を通じて朝鮮人の満洲移住を推進することにあった。それは同時に、満洲における朝鮮人移民の状況を把握するためでもあった。

たとえば、『毎日新報』上では巡回した各開拓部落の状況を詳しく紹介し、公演を見る移民者が少なくなかったことが記されている。8月26日に行われた柏根里第3団では、全170戸、400人ほどが参加していた。第3団の人口は、記録によれば535人であり³⁴⁾、実に80%

34) 「満洲開拓慰問団の現地報告」『毎日新報』1942年9月3日付

ほどの朝鮮人が慰問講演に参加していた。

以上、「満洲国」建国10周年満洲朝鮮人慰問団の活動について見てきたが、朝鮮総督府の政策意図を整理すれば二つの点が挙げられる。

第一に、朝鮮人満洲移民の文化生活を向上させることを建前としていたが、内実は朝鮮人移民の皇国臣民への教化であった。朝鮮総督府は、満洲朝鮮人移民の思想傾向を把握して統制しようとした。朝鮮総督府は慰問講演を二つの班に分けて巡回させたが、第1班は北満洲の移民部落、第2班は東満洲の移民部落といったように、それぞれ国策移民部落を担当した。当時、南満洲では数多くの朝鮮人移民部落が存在したが、朝鮮総督府が重視したのは国策移民部落のみであった。抗日闘争が激しかった地域であり、反日感情が高い朝鮮人満洲移民に対する朝鮮総督府の憂慮があった³⁵⁾。それゆえに、慰問講演を通じて国策移民部落に対する思想教化を強めようとした。

第二に、慰問団に関する報道を通じて、朝鮮総督府は満洲の朝鮮人移民部落に関する「生活事情」を朝鮮内へと宣伝した。朝鮮人満洲移民の募集が計画通りに進まないなか、朝鮮総督府は満洲における移民生活が裕福であるという「事実」を伝えようとした。慰問団が巡回した朝鮮人部落がすべて国策移民者部落だったのは、自由移民より国策移民を通じて満洲へと移住した方が「安心」できることを宣伝するためであったのである。

2.3 朝鮮内の朝鮮人移民推進宣伝活動

朝鮮人満洲移民地域に関する宣伝

ここでは、『毎日新報』に加えて、『釜山日報』などの日本語紙も利用しながら、朝鮮総督府による朝鮮人満洲移民の状況説明について見ていくことにする。主に、朝鮮総督府が派遣した満洲移民視察団や慰問団による現地報告、朝鮮総督府の官僚による満洲移民政策に関する報告記事を用いる。これらを通じて、満洲における朝鮮人部落の様相が見られる。まずは、各記事からその様相を確認していく。

1942年8月5日付の『毎日新報』では、朝鮮人満洲移民の収入と生活について、次のように報告されている。この記事は先に部分的に紹介したが、ここであらためて検討してみよう。

35) 前掲「韓人の満洲移住様相と東北アジア」、244頁

それでは早田4町歩で1家庭が1年に生計を立てられるだろうか? いったい地区の主作物は何だろうか? 満拓で言われていることを聞くと大豆、ジャガイモ、粟、包米(トウモロコシ)、小麦などが、それである。これを4町歩に適当に植えれば、年収入はどれほどだろうか。私[柳致眞]はここで数字を問いただすだけの紙面がないので、結論だけを言う。

私が団員に聞いたことによれば、4町に400、500円の年収にしかならないというのである。

しかし、この収入では農耕費を除いて、さらに、牛馬まで育て(牛馬も相当に[エサを]食べるといふ)、そして1家族の1年の生計を営むことはできないだろう。加えて、朝鮮より物価が高い満洲であるためだ。

しかし、落胆してはならない。収入はそれだけではない。この地帯は、先に述べたように、有畜混同農業を選択しているのではないか? この他に牧畜がある。そしてまた、毎戸5町歩ずつ分配される薪炭備林地から木炭も作る。実情は、この副業が本業の農業よりも収入において劣らないということだ。

これにより開拓民の生計への心配は解消される³⁶⁾。

この記事は、満洲において朝鮮人の生計が保たれていることを伝えている。記事と実態の乖離については後述するが、この記事だけを見れば、朝鮮人移民は収入こそ余裕があるわけではないが、生活には困窮していない状況であるという。農作収入が足りない、満洲の物価は朝鮮より高いなどといった満洲視察団の疑問に対して、有畜混同農業を選択すれば、副業が本業の農業よりも収入において劣らないと移民部落の指導員から回答があった。ただし、問題は本業と副業のどちらも何ら支障なく営めた時だけに限定されているという点である。たとえ副業がうまくいったとしても、農業における収入が不充分であれば、記事の話は成立しえず、また逆もしかりである。さらに、どちらも十分に営めなかった場合もここでは想定されていない。つまり、農業と副業による収入が十分に満たされた時だけが当てはまるのである。そのため、この記事は、朝鮮人満洲移民は農業と副業により生計が保たれるという理想的な像を朝鮮内へとひろげることが、念頭を置いていたものであると言える。このような内容を記した記事は朝鮮人作家の満洲視察団によるものに限らない。前節でも用いた1942年2月15日付『毎日新報』の全羅南道視察団報告でも確認できる。全南視察団は「慰問を兼ね」た「現地を調査」³⁷⁾することに目的を置いていた。目的の一つである現地調査の結果について視察団の香山周永は、「食糧も衣服も朝鮮よりかえって配給も良くなった」、「たぶんこのまま行けば、何年も経てばレンガの家に住むようになる

36) 「開拓と希望 満洲開拓地を見て【七】」『毎日新報』1942年8月5日付

37) 「全南視察団が新京到着」『毎日新報』1942年2月15日付

でしょう」、「これまでに心配していたことが杞憂だったことがわかりました」と語っている。香山周永は全南視察団の団長であり、朝鮮総督府における農政課長の職位にあった。また一方で、全羅南道農民訓練所における短期農民訓練所の理事も勤めていた。ここから、香山が朝鮮人を農業移民として派遣する政策を担い、また農作業を訓練させる立場にあったことがわかる。香山が『毎日新報』を通じてなそうとしたのは、満洲における朝鮮人農民の生活に対する「心配」を専門家的立場から「安心」という認識へと変化させることであった点だと考えられる。それにより、朝鮮人が満洲へと進んで移住できるようにしたかったのが内心であっただろう。

生計問題に関しては収入状況だけでなく、居住や衛生状況についても同様に言える。『毎日新報』1942年6月26日の記事には朝鮮人作家の満洲視察団が視察した後、朝鮮に帰って朝鮮総督府間の報告座談会の内容を記している。

白矢[毎日新報社] 部落民の住宅又は衛生状況はいかがでしたか。

張 住宅も充分とはいえません。現在の状態から見ると、中央に台所があり、左右に一間ずつ部屋がありますが、そこに、その一棟舎宅に2世帯が住んでいる状況でした。そして、すぐ台所や居室と連接して、牛馬舎のようなものが連なって、衛生上でも考慮すべき点があります。

白矢 この問題に対して、当局では改善される計画があるでしょうか。

青山[朝鮮総督府拓務課長] 現在のものは1棟16坪5合として建築費が850円程度ですが、この住宅や衛生問題については、当局側としても特別な考慮をしているところです。³⁸⁾

この記事を確認すると、報告座談会の参加者である毎日新報社の白矢鉄が住宅、衛生に関する問題を提起して、朝鮮人作家の満洲視察団の成員である張赫宙が満洲で見る状況を紹介し、朝鮮総督府の移民担当者であった朝鮮総督府拓務課長青山信介が対策を回答するというものであった。実際にそのような計画が存在していたのか、また存在していたとしてもどれほど具体化されていたのかは明らかではない。それでも衛生問題に対する対応には迫られていたと言えよう。

朝鮮総督府は『毎日新報』に朝鮮人満洲移民に関する情報を掲載することを通して、満洲は居住に適しており、生活が良い、未来はさらに良いという満洲の理想像を朝鮮内に流布していった。他にもたとえば、衣服の獲得が難しさや衛生状況が厳しい³⁹⁾という内容が含まれている場合、そのような生活問題に対して一応の解決策を示している。ここから、満

38) 「開拓地の課題 特派作家の報告座談会」『毎日新報』1942年6月26日付

39) 同上

洲では何も問題ないと言うのではなく、いくつかの問題点があるが、全部解決できるとしたことがうかがえよう。これは満洲への朝鮮人移民がうまく募集できないなか、発生する問題への対処可能性を示す方が宣伝としての効果が発揮され得ると判断した結果なのではなからうか。

満洲移民座談会

朝鮮総督府は、朝鮮人満洲移民の貧しく非衛生的で劣悪な状況という認識を変容させる必要があった。そこで座談会を開催し、満洲内の朝鮮人移民の暮らしを紹介することを積極的に強調し始めた。

朝鮮総督府は1940年9月30日に朝鮮京城に座談会と講演会を開いた。また、そこでは「満洲開拓の実像」という開拓映画も上映したという。ここには「満洲国」の開拓関係者、朝鮮総督府の政務総監、各中等以上学校の生徒などが参加した。

この座談会の目的は、「故国に背を向けて、満洲の原野に進出し、クワを持って開拓の情熱に燃える半島の開拓部隊の苦心と偉大なる事業を一般人にひろく知らせて、また称賛しようとする」ところにあった⁴⁰⁾。

ここでいう「一般人」とは誰のことを指すのか。この疑問を解くため、まずは座談会の参加層を見ておく。『毎日新報』1940年9月30日付と10月1日付の記事には、座談会の参加者は「満洲国開拓総局関係者と本部及び各道関係者と府内名士諸氏30人」、「席上には松澤専売局長、鈴木外務課長、辻拓務課長、岸農村振興課長、倉茂軍報道部長であり、民間側では韓相龍氏、崔本社社長[毎日新報社]など軍官民30名の出席」と記録されている。

朝鮮総督府の職員以外に参加する民間側は、韓相龍と当時の毎日新報社社長崔麟、軍官民30人余りであった。韓相龍と崔麟は朝鮮総督府と密接な関係を持っていた親日派朝鮮人である。各道関係者と府内名士諸氏30人が参加したことは、座談会に参加した人物が各道において移民活動に関係した有力者だということがわかる。つまり、朝鮮人有力者に満洲の認識をひろめようとしたのである。しかし、「一般人」は朝鮮人有力者だけではなく、面レベルの普通民衆まで宣伝を行った。これについては、以下で述べることにする。

それでは、座談会を通じて「一般人」に知らせようとした「事業」とはいったい何だったのか。

先に鮮満拓殖会社総裁二宮から、暗くなった過去から希望にあふれる今に至るまで、教育、産

40) 「開拓民を再認識」『毎日新報』1940年9月30日付

業、交通、衛生など各部門を通じて、力強い大陸の建設に汗を流している半島の開拓部隊の盛況を一通り報告した。

報告した後、座談会に先立って、韓相龍を座長に推薦した後、各部門に照らして、希望と質問を忌憚なく打ち明けてこそ、満洲開拓の国家事業に意味深い新しい出発を約束し、和気あいあいとした中で、正午頃、座談会を終えた。[後略]⁴¹⁾

以上の史料から、座談会は、朝鮮人の満洲移民が「得した事業」を朝鮮内の有力者にひろく伝えている。朝鮮内の有力者の満洲に対する認識を変えるためのものであったことがわかる。

以上のように、この座談会の内容は朝鮮内の有力者に満洲の認識を伝えたものであった。座談会の目的は、朝鮮人の満洲開拓民の「得した事業」を朝鮮人にひろく伝えている。即ち、満洲に悪い印象を持った朝鮮人に満洲は希望があり、現在より居住に適した場所だということを宣伝した。

朝鮮総督府は、1942年2月6日、京畿道庁の第2会議室で朝鮮人開拓民座談会を開いた。参加者のなかには満洲へと移住した朝鮮人移民の代表19人がいた⁴²⁾。史料には座談会の経過が次のように記されている。

張達元(間島省普成屯)[中略]普成屯部落は、満洲建国当時は12戸しかありません。今は32戸となり、子供の初等教育も安心して行なうことができるようになった。

松原秉吉(間島省龍家坪屯)[中略]満洲事変以前には朝鮮人には土地の所有権を与えず、開墾したとしても、自分の所有にはできなかった。そのため、開墾した土地も満洲人の小作を得るといふ形しかできなかった。しかも開拓民がだんだん増えるのにしたがって小作も思うようにできず、農作業でも自己収入という話にもならなかった。その後、満洲国建国後、私たちは初めて自分の生活を維持していけるだけの土地を持つようになった。ここで私たちは生活根拠を得るようになったのだ。今になってみれば、自給自足できるような生活ができる。10年余り前のことを考えると、夢のようだ。中には土地がない人もいるが、彼らは頑張って仕事をしていないからだ。真心を尽くした人には、苦しい生活をする人はいない。⁴³⁾

ここで発言した張と松原は、朝鮮人開拓民座談会に参加した満洲朝鮮人移民の代表であり、松原の話によると、「満洲事変」前における満洲の朝鮮人は貧困生活を送っていたが、「

41) 「前途はただ洋々 開拓勇士の向上方途を披歴」『毎日新報』1940年10月1日付

42) 「満洲建国以後、収入も待遇も向上」『毎日新報』1942年2月7日付

43) 同上

満洲事変」後には土地の確保ができ、資金も自足していた。すなわち、満洲の生活が豊かだったということである。これは、開拓民が自分の実際の生活を紹介する形式で宣伝する方法である。

ただし、この座談会は単に満洲における朝鮮人の生活を紹介するだけにとどまらなかった。

朴用述(延吉県明月村)朝鮮に来てみると、満洲に行けば、ただで食べられるのかと聞いてくる人もいた。満洲開拓民の努力を理解できないことに驚いた。

[中略]洪淳黙(安東県風城街)朝鮮に久々に来てみると、農耕地が不足し、農村の生活はあまり豊かではなかった。しかし、希望の多い満洲開拓民は官庁で募集している。どうして大陸の開拓戦士として、または生活根拠をつかむために、自発的に満洲に行くことができないのか疑問である。志のある人が満洲に行って大陸を開拓すれば自分たちも生活根拠を得るようになり、朝鮮に残った人も十分に農地をどこの農作業でもできるのではないか⁴⁴⁾。

開拓民座談会を開催する目的は、同記事に「朝鮮を視察した感想を発表する」と記載された。張、松原と同じく、朴、洪も満洲朝鮮人移民の代表である。座談会は全体として「国民貯蓄運動」への協力を訴えており、つまりは大日本帝国の戦争体制建設への協力を訴えるものであった。満洲に移住した朝鮮人の発言のなかには、彼らは朝鮮における農耕地が不足し、朝鮮農村の生活は困窮していたという面がある。それからまた、なぜそのような苦しいのに「開拓戦士」として「自発的」に満洲にいかないのかと疑問も呈している。このような発言が取り上げられたのは、満洲が朝鮮内よりも居住に適した場所であることを宣伝することで、朝鮮人の満洲移民を増やすことに繋がると考えられたためだと思われる。朝鮮人の「自発的」な発言という形式を備えることで、その波及効果が期待された。そのようにすることで、日本の戦争体制建設へ資することができたのである。

さらに、朝鮮総督府は朝鮮内の農民に対する開拓動員座談会も組織した。

【華川】漢江水電華川工事場水没地帯1200余戸移民問題は、道当局で去年の春以来、各方面に斡旋し、数百戸を道内に移住させたが、いまだに小作農極貧者の移住問題がそのまま残っている。その対策を討論するために、23日午前9時から郡会議室で木原道農政課長の司会下、春川、楊口、麟蹄各郡代表者と本部平井事務官、満拓幹事が集まって満洲開拓民座談会を開催した。先に木原道農政課長から昭和17年度入植計画に対する説明と平井事務官から帝国の東亜秩序建

44) 同上

設のために、道義的新大陸政策に順応し、満洲開拓に全力を尽くすことの講演と各郡の代表者たちの意見陳述と質疑があった。[中略]集団移住について1戸当たりの旅費は60円を補助し、共同施設費で264円を補助して、鉄道費も6割に割引し、農業技師、畜産技師まで派遣して、移住民生活に万全を尽くすのだというが、耕地面積は1戸当たり10町歩であると言う⁴⁵⁾。

この記事は1941年10月、華川地域に漢江水電工事のため、土地が水没した農民について、開催した満洲移住の座談会だった。水没農民のうち、数百戸は道内の他の所に移住を進めており、残りの小作農極貧者を満洲に移住させる計画だったことが確認できる。この開拓民座談会には朝鮮総督府の事務官、満拓幹事、江原道の農政課長ら朝鮮人満洲移民関連担当者が参加していた。座談会で朝鮮総督府は集団移住民に対して1戸当たり60円旅費を、共同施設費として264円を補助し、さらに1戸当たりの満洲の耕地面積が10町歩も保障されるとした。当時、平均耕地が1.5町歩しかない朝鮮の農村⁴⁶⁾と比較すれば、10町歩もの耕作面積が与えられるというのは大きな宣伝効果を持ったであろう。朝鮮人側がどのように捉えたのかはここでは明らかにできないが、少なからずその影響は存在したと言えよう。

満洲移民講演会

1941年2月、朝鮮総督府は洪城に満洲開拓民講演会を開催した⁴⁷⁾。この講演会の参加層を史料からは十分に確認がとれないが、地方官民が参加したことは確認できる。講演会は次のような状況であったという。

【洪城】洪城では去る10日午前11時から洪城面会議室で官民多数列席の下、本道から来た道属の満洲開拓についての講演があり、同日午後7時から映画会があったが、この日の人気は極めて高かったという⁴⁸⁾。

ここで「講演」する地域である洪城面は忠清南道洪城郡の郡庁所在地であった。「講演」は、道庁から来た職員が担当したようである。講演を終えた後には映画会も行われ、『毎日新報』が伝えたところによれば、「人気は極めて高かった」。朝鮮人満洲移民に関する宣伝活

45) 『満洲開拓民座談会 華川郡庁で開催』『毎日新報』1941年10月30日付

46) 『朝鮮経済年報』昭和16年版、1941年、82頁

47) 『満洲開拓の夜』『毎日新報』1940年10月2日付

48) 『満洲開拓講演 洪城で盛況』『毎日新報』1941年2月13日付

動が面単位で講演会や映画会を開いて満洲への移住を勧めていたのである。朝鮮総督府による宣伝活動は、総督府から道、郡、さらに面単位にまでおよんでいた。朝鮮各地の農民について最も詳しいのは各郡面有力者だったからである。

他方、言論機関も満洲における朝鮮人移民の訴えを掲載している。1941年2月13日付『毎日新報』の記事では、忠清南道出身の満洲移民が移住した後の生活について述べられている。1940年5月に北安省柏根里に移住した忠清南道出身者の生活は、「人多地狭である朝鮮内では想像もできないほど豊かである」としている。また、生活習慣は朝鮮と同様で、酒とタバコは自由に飲み、吸うことができ、豚と牛は自由に食べることができるという。それだけでなく、土地が肥沃で肥料を使わなくとも豊作を迎えられ、日常生活の必需品は満洲拓殖会社がすべて貸与してくれるという。満洲の朝鮮人移民は満洲を「夢に見た人間楽園」と呼んでいたという⁴⁹⁾。

この記事は満洲の朝鮮人移民の言葉をそのまま記載するという形式になっている。こうした移民当事者の言葉が、満洲移住の促進へと繋がったであろう。特に生活が裕福で習慣も朝鮮と変わらないことの強調は、これまでとは一線を画す。なぜなら、従来の記事では、満洲における朝鮮人移民の生計には問題があるがそれを解決する方向であるとの記載内容であったことに対して、この講演会の記事は移民の生活や習慣がそもそも問題ではなく、むしろ生活は裕福で、習慣も朝鮮内と何ら変わることがないと強調しているからである。朝鮮総督府はこのような活動を通じて、朝鮮人の満洲に対する認識を変え、満洲移民を希望する朝鮮人を募集したのである。

しかし、もう一つ注目すべきところは、柏根里の朝鮮人開拓団である。1940年5月に移住したこの開拓団は、1943年まで、少なくとも6回にわたって朝鮮から派遣した視察団や慰問団が訪問した。この頻度の視察は、柏根里開拓団をモデルとして、宣伝を行ったと推測できる。すなわち、一つだけのモデル開拓団を視察、宣伝することを通じて、満洲朝鮮人部落の生活が全部このように裕福であるという理想像を作る朝鮮総督府の意図が見られる。

1941年12月には朝鮮移住協会の主催で南鮮各道満洲開拓民座談会が開かれている。この座談会には当時の朝鮮総督府外事部長であり、朝鮮移住協会の会長である諏訪務が「満鮮一如」という演目で講演を行った。また、「満洲国」、満洲拓殖会社、朝鮮移住協会の関係者が立て続けに講演を行った。公演の後には国民学校に通う朝鮮人移民学生の優勝作品集が広報された⁵⁰⁾。優勝作品集は総計500件余りの作文、絵のなかで選ばれたものであった。ここ

49) 「満洲農村は住みよい所 同胞たちは早く来い 忠南出身の開拓民に喜び消息」『毎日新報』1941年8月3日付

で優勝作品に選ばれた「私ノ家」という作文を見てみよう。

「私ノ家」

朝鮮ニ居ル時ハ、私ノ家ハ大ヘンマズシクテ毎日常ラシニ困リ、トウトウ満洲へ来ルコトニナリマシタ。満洲へ行ツタラ、ヒロイ野原ガ有ツテ何所ニ行ツテモ、タノシククラス事ガ出来ル、ト聞イテ長イキ車ニノツテ、グン歌ヲ歌ツタリシテ此所へ来マシタ。此所ハフカイ山オクデヒロイ野原ハ見ル事ハ出来マセンデシタハジメハカナシクテタマリマセンデシタガ、会社ノ人ガタクサンオイデニナツデオ父サンタテニ色々ナヨイオ話ヲシテ下サツテクサンノシクリヨウヤ、クワヤシヤベルヤ其ノホカ色々ノキカイヲブラクノ人ニ分ケテ下サイマシタ⁵¹⁾。

朝鮮での生活は貧しかったが、満洲にきて色々な機会を分けてくれるような親切にも出会い、良好な印象を抱いたことを表している。この他にも作品集で賞を得た作文には、満洲における生活が良好なという内容が必ず含まれている。それだけではなく絵画でもそのほとんどが満洲での豊かな生活を描写する作品で占められていた。

ここで注目すべきところは、朝鮮総督府は総計500件余りの作文、絵のなかで、優勝作品を選んだことである。広報された優勝作品集の内容を確認すると、満洲における生活が良好であるという内容が必ず含まれている。全部で500件余りの作文、絵は確認できないが、優勝作品の選択傾向を見ると、朝鮮総督府が満洲朝鮮人生活を宣伝するためという意図を確認できる。作文、絵は学生の本心で書いたのかは確認出来ていないが、作文、絵のなかで展示した満洲生活は後章で述べた朝鮮人満洲移民の生活実態とは差異がある。このように朝鮮総督府は『毎日新報』を利用し、学生の作品を通じてまで満洲における朝鮮人移民の生活をひろく知らせようとした。

ここまで、朝鮮総督府が進める朝鮮人満洲移民活動の推進活動を確認した。座談会、講演会など様々な推進活動を通じて朝鮮総督府は朝鮮の満洲に対する印象を変容させ、朝鮮人満洲移民者募集に対する政策を進めてきた。すなわち、朝鮮内農村の労働力がますます不足している状況下において、朝鮮総督府は推進活動を活発に進めたのである。

50) 「満洲開拓民講演集」、朝鮮移住協会、1941年、韓国国家記録院所蔵、CJA0002508

51) 前掲「満洲開拓民講演集」

3. 朝鮮総督府の移民宣伝と朝鮮人移民の生活実態との乖離

3.1 農作をめぐる

ここでは、朝鮮総督府の移民宣伝が朝鮮人移民の生活実態と、どれほどの乖離があったのかを検討する。朝鮮人移民の農作実態を見ていく前に、朝鮮総督府による移民宣伝のなかで朝鮮人移民の耕地面積に関する報道が如何なるものであったのかを確認しておきたい。1939年11月15日付の『毎日新報』上で朝鮮総督府外事部長は次のように発言している。

従来よりも耕作面積を増やし、一戸に対して耕地10町歩ずつを与え、合理的営農をして、開拓民としての新たな画期的活動ができるようにするというので、今回の新方針は将来開拓民に良いモデルになるものと期待されている⁵²⁾。

朝鮮総督府外事部長は、朝鮮人「開拓民」が満洲において「合理的営農」をすることで将来の開拓事業に良い影響を与える旨を伝えている。また「合理的営農」をするには、1戸に対して10町歩ずつの耕作面積を与える必要があることも話している。つまり、1戸につき10町歩の耕作面積さえ与えれば「開拓事業」が「合理的」に進むと考えられていたのである。満洲開拓事業をはじめた際の朝鮮総督府側の認識はこのようなものであった。それでは、朝鮮人移民が実際に持った耕作面積がどうであったか、また「合理的営農」はどこまで可能であったかを検討していくことにする。そして、この10町歩ずつの耕作面積を与えることは1940年から開始されたので、1939年までの朝鮮人移民者の耕地面積は「合理的営農」、つまり生活することが困難であると判断できる。

それでは、耕地面積の実態はどうだったのかを見てみよう。1戸10町歩ずつは実際に与えられたのだろうか。

ここでは、朝鮮人移民が多くに移住した北満洲の耕地面積状況を見てみよう。『毎日新報』1942年7月18日付の記事では、「忠慶開拓団の1戸当たり土地面積は水田3.2町歩」であったとされている⁵³⁾。忠慶開拓団は、朝鮮南部の忠清南道や慶尚南道から集められた農民が、「満洲国」北安省へと移住した一団であった。1940年鮮満拓殖の統計によると、忠慶開拓団は867戸あり、畑が257.48町歩であった。一戸当たりの平均耕地面積は畑0.3町歩しな

52) 「毎戸に十町歩を与え 半農半牧制を実施」『毎日新報』1939年11月15日付

53) 「集団移民第一陣忠慶開拓団訪問記」『毎日新報』1942年7月18日付

かった⁵⁴⁾。1940年の畑0.3町歩から1942年の水田3.2町歩に拡大したのは、朝鮮移民が2年の間に荒地を開墾し、水田を作ることであった。しかし、水田3.2町歩という耕作面積も朝鮮総督府が宣伝した10町歩より少ないと見ることができよう。

しかしながら、朝鮮総督府は「朝鮮人開拓者と日本人開拓者が同一条件で移住する」という内容で宣伝を進めていた⁵⁵⁾。蘭信三の研究によると、北満洲に移住する日本人移民は、人当たりの土地面積が10-20町歩ほどあり、自分の力では開墾できないため、中国人、朝鮮人の雇農まで雇って農業を行ったと指摘されている⁵⁶⁾。

ここまで朝鮮人移民部落の平均耕作地面積を確認してきた。実際の朝鮮人移民の耕作地面積は朝鮮総督府の宣伝内容である10町歩の耕作地面積より少なかったことが確認できる。それにもかかわらず、朝鮮人移民が移住する耕地も荒地であった。移民土地の自作と小作の差異もあるが、単に耕作地面積を見ると、10-20町歩の耕地を与えた日本人移民と大きな差別があったことを確認できる。朝鮮総督府の宣伝内容と比較することによって、朝鮮人移民の実際耕作地面積は大きな差異があったと判断できる。

続いて、朝鮮人移民の経済的な側面から生活実態を確認してみよう。朝鮮総督府は満洲に移住すれば、朝鮮より良い生活ができると宣伝を展開したが、宣伝内容の真偽は朝鮮人移民の年間収入を通じても判断できる。また、朝鮮人移民の年間収入を明らかにすることは、朝鮮人移民の生活実態を把握するうえで有効な手段である。したがって、朝鮮人移民の収入を確認する。朝鮮人移民の収入については、満鮮拓殖作成の朝鮮人農家収入および支出表が参考になる。

<表3-1> 朝鮮人農家収入計算表

水田作業の場合(北満洲地域)				
費目	面積	収穫量	単価(円)	金額(円)
粃	2.4町歩	57.5石	8	460
蒿	-	10.8斤	2	21.6
副業収入	-	-	-	20
総計	-	-	-	501.6

54) 『満洲開拓年鑑 昭和十六年版』満洲国通信社、1941年、296頁

55) 「貸付資金は長期に 利息も大幅引下」『毎日新報』1939年10月28日付

56) 蘭信三(1994) 『「満洲移民」の歴史社会学』行路社

畑作の場合(北満洲地域)				
費目	面積	収穫量	単価(円)	金額(円)
農産物	4.5町歩	-	-	362.4
副業収入	-	-	-	23
役畜収入	-	-	-	22.4
総計	-	-	-	408.8

出典：高見成(1941)『鮮満拓殖株式会社鮮満拓殖株式会社五年史』、235頁

<表3-2> 朝鮮人農家支出計算表

水田作業の場合(北満洲地域)	
費目	金額(円)
営農費	81.14
家計費	222.88
総計	317.02
畑作の場合(北満洲地域)	
費目	金額(円)
営農費	80.01
家計費	249.91
総計	329.92

出典：高見成(1941)『鮮満拓殖株式会社鮮満拓殖株式会社五年史』、235頁

<表3-3> 朝鮮人農家差引金計算表

地域	収入(円)	支出(円)	差引金(円)
水田作業の場合(北満洲地域)	501.6	317.02	184.58
畑作の場合(北満洲地域)	408.8	329.92	78.88

出典：高見成(1941)『鮮満拓殖株式会社鮮満拓殖株式会社五年史』、235頁

<表3-1>、<表3-2>、<表3-3>は鮮満拓殖が朝鮮人自作する場合を条件として朝鮮人農家の収入、支出を計算した結果である。<表3-3>を見ると、年間差引金が少なくとも78円あったが、これは、鮮満拓殖の貸付金を返納する必要がない自作農の差引金である。しかし、前文で述べたように、8割以上の朝鮮人移民が鮮満拓殖から貸付金を受領していた。鮮満拓殖の貸付金とは、朝鮮人移民の移住後の家屋建設費、初年度営農費などを鮮満拓殖から貸出する資金である。北満洲に移住する場合、移民毎戸当たり貸付金は1165円で、利子は1.58

割であったという⁵⁷⁾。すなわち、北満洲朝鮮人移民の収入184.58円のうち、貸付金利子184.07円であった。移民に残ったのは0.51円しかなかった。朝鮮総督府と鮮満拓殖会社は厳密な調査を通じて、朝鮮人満洲移民の農作利益を貸付金利子として、収奪していたことが確認できる。

貸付金の利子に関して、1939年10月28日付の『毎日新報』の記事を見てみると、朝鮮総督府外事部長松澤龍雄は以下のように移住後の貸付費用利子について説明している。

[貸付費]金利を従来一割や八・九分になったことについて、今回は五・六分にして、返納期間なども便宜を与えて、完全に内地人開拓民と同じ取り扱いをする⁵⁸⁾。

上記の記事内容を見てみたところ、松澤は朝鮮人移民の貸付金の利子を従来の半分まで減少させるということにしている。しかし、北満洲地域を例として、朝鮮人移民の貸付金の利子は1.58割に達して、朝鮮人移民に大きな負担を与えた。朝鮮総督府の貸付金の利子に関する宣伝内容と実際の状況について、大きく差異があったことを確認できる。

また、上記の朝鮮人移民収入に関する計算は該当計算年度においては、水田1町歩の収穫量が24石の標準として計算した結果である。農業施設が健全な北満洲河東農村も1933年から1940年の間、1町歩の収穫量が24石の標準に未達であった年度は三年あった⁵⁹⁾。豊作以外の年、朝鮮人満洲移民は1年間の営農後に残った資金で鮮満拓殖の貸付金利子まで返すことができなかつた状況であった。同時に「満洲国」の物価が大幅に上昇し、特に農作業の営農費が増加した⁶⁰⁾。しかし、米の販売費用は「満洲国」の価格公定の規定⁶¹⁾に限られていたため、朝鮮人移民は市場価格より安価で「満洲国」に販売するしかなかった。このような状況において、朝鮮人満洲移民の生活が朝鮮内の状況より余計に悪化していた可能性もあると推測できる。

以上の分析から朝鮮総督府の移民宣伝内容のうち、耕地分配面積と実際農作収入に関する内容を確認した。朝鮮総督府の移民宣伝内容をまとめると以下の3つに整理できる。

57) 前掲『鮮満拓殖株式会社鮮満拓殖株式会社五年史』、244頁

58) 「貸付資金は長期に 利息も大幅引下」『毎日新報』1939年10月28日付

59) 朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶ノ水書房、2015年、160頁。原史料は「第67回帝國議會説明史料1934年」辛珠柏編『日帝下支配政策資料集1』高麗書林、1993年、518頁、朝鮮総督府『朝鮮総督府施政年報』1933年度-1939年度、前掲『鮮満拓殖株式会社鮮満拓殖株式会社五年史』、1941年、88頁より作成

60) 「満洲國 物價騰貴 - 穀物、魚肉類 筆頭」『毎日新報』1939年10月11日付

61) 権哲男(2013)「『満洲国』時期農産物価格変化および農業生産に対する影響」東京経大会誌第 279 号、96頁

1. 朝鮮人移民に土地10町歩ずつ与える。
2. 移住後の貸付金の利子を5—6分まで下げる。
3. 朝鮮人満洲移民の待遇は、日本人満洲移民と同じとする。

朝鮮総督府は宣伝を通じて朝鮮人農民に満洲に移住すれば朝鮮より豊かに暮らすことができるという理想像を形成していたと判断できる。朝鮮総督府は耕地を中心に、移民プロパガンダを進め、満洲に行けばよい生活があるという理想像を朝鮮南部の農民に宣伝したと見られる。しかし、朝鮮人移民後の耕地面積、貸付金利子などの実際の状況は朝鮮総督府の宣伝とは懸隔があったことは明白である。朝鮮総督府の満洲移民宣伝は、実際に満洲の朝鮮人生活状況を比べると大きな差異があったという点が確認できる。

3.2 保健衛生をめぐって

朝鮮総督府は募集する際、土地関連以外にも「満洲に行けば食べ物も多く家も大きく衛生状況もよい」と宣伝を行っていた。ここで注目したいのは満洲における「衛生状況」である。衛生の問題は居住、食料事情の両方に関わってくる問題であるからである。健康を保持するためには栄養のある食事をとる必要があり、病気に罹患しないようにするためにそれなりの衛生環境が整っていなければならない。耕作地面積や収支関係を通して確認された生活状況の劣悪さからして、衛生状況の劣悪さも想定される。そうしたことからここでは、衛生状況の実態と朝鮮総督府による宣伝間の乖離を検討していくことにする。その際、満洲地域の病院や医療施設(医師含む)の状況とも関わらせて衛生問題を検討する。病院や医療施設は防疫事業を担当していた。感染症などに対する予防・対処の側面からも衛生状況を捉えられると考えられるため、この点も合わせて考察する。

朝鮮人移民部落の衛生状況を見る前に、「満洲国」全域の医療施設・環境について検討する。それを通じて朝鮮人部落における衛生の実態を把握することにつなげる。

「満洲国」民政局衛生司の統計資料によると、1940年現在、「満洲国」の病院施設(国立病院及び公立病院)は54ヶ所あった。また、各県には病院より規模の小さい福祉医療所が300ヶ所ほどあった。「満洲国」の全200県に福祉医療所が一つか二つは設置されていたことになる⁶²⁾。福祉医療所の設置により、「満洲国」では医療施設が県レベルにまで普及したといえ

62) 『民生年鑑』満洲国民生部編、1940年

よう。

1940年当時の「満洲国」において、朝鮮人の8割は農村地域に居住していた⁶³⁾。都市から遠く離れた朝鮮人移民部落で治療を受けたければ、都市へ行って病院を訪れるより移民地域にある医療施設で治療を受ける方がより現実的であったと推測できる。移民地域にある医療施設の状況を確認することは、当該地域の医療レベルを判断できる。

それでは、日本人と朝鮮人のそれぞれの移民部落において、医療施設がどれほど整備されたのか。<表3-4>は、日本人と朝鮮人の移民部落における医療施設と勤務人員の状況がまとめられたものである。

<表3-4> 1940～1942年「満洲国」移民部落の医療施設と勤務人員の統計表

	日本人移民			朝鮮人移民		
	1940年	1941年	1942年	1940年	1941年	1942年
部落数	89	151	195	不明	190	215
病院と診療所数 (医務室含む)	89	151	不明	不明	なし	なし
勤務人員数 (医師と補助者を含む)	263	271	不明	不明	83	62
病床数	301	429	不明	不明	なし	なし

出典：1940-1942年「満洲開拓年鑑」保健衛生部分より作成。

<表3-4>からは、日本人移民部落では部落ごとに医療施設がひとつ設置されていたことがわかる。勤務人員も通常の医療施設と比較すれば充分ではないが、ある程度は確保されていたと見てとれる。一方、朝鮮人移民部落には、医療施設が設置されていなかったようである。ただし、医療従業員は3つの部落あたり1人ほどがいたことが確認できる。医療施設はなかったが、医療に携わる人はいた。それでも、日本人移民部落における従業員数と朝鮮人移民部落におけるそれとの差は1941年現在に限って見ると4倍ほどもあった。それだけではなく、朝鮮人部落における医療従業員は41年から42年にかけて減少さえしていたのである。医療施設と従業員を見た場合、朝鮮人部落においては衛生や治療に関する環境は十分に整っていなかったことが確認できる。

次に、医療補助金について見てみよう。1941年の鮮満拓殖株式会社と満洲拓殖公社の合併は、朝鮮人移民と日本人移民との待遇を名分上平等にした。『満洲開拓年鑑 昭和十六年

63) 前掲『鮮満拓殖株式会社鮮満拓殖株式会社五年史』、4頁

版』中の「開拓者」補助金の部分を見ると、「集団開拓者200戸当たり17,040円、集合開拓者50戸当たり1,450円」が医療補助金の標準とされていることが確認できる⁶⁴⁾。医療補助金の内訳を見ると、集団開拓者200戸あたりの17,040円の内、医療設備および薬品の補助金が3,400円、医療施設の建設補助金7,000円、医療施設の経営補助6,640円となっている⁶⁵⁾。「開拓者」補助金は移民の医療から設備、薬品、施設、経営までを含んでいる。同時に、「集団開拓民は、一つの部落に公医一名を設置し、六つの部落ずつ補助医師一名を配置する」と規定した。〈表3-4〉からわかるように、日本人移民部落には、各部落に診療所を1ヶ所設置し、1人以上の医療従事者が就いていた。これは満洲の日本人移民部落の医療システムが体系的に設置されていたことを示している。日本政府と「満洲国」政府は、日本人移民部落の医療施設を綿密に設置することで医療体制を充実させていた。

しかし、朝鮮人移民部落における医療施設は日本人移民部落と同様には整備されていなかった。1941年から朝鮮人移民と日本人移民に対しては同一の基準が適用されるはずであったものの、『満洲開拓年鑑 昭和十七年版』では「朝鮮人移民に対し、一つの部落に公医1人を設置」と日本人移民の各部落に診療所を1ヶ所設置することと異なることを記載している⁶⁶⁾。そして、記載のなかで移民部落の医療施設に対する金額にも触れなかった。1941年の朝鮮人部落の状況を見てみると(〈表3-4〉参照)、190ヶ所の朝鮮人移民部落に設置された公医は83人しかなかった。朝鮮人部落1ヶ所当たりの公医は0.4人程度にしかならなかったのである。「1つの部落ごとに公医1人が設置」という規則は実際の状況とは大きな差異があった。「衛生状況もよい」との宣伝内容とは相違する内容であった。むしろ、当局は朝鮮人移民に対して日本人移民に比べて差別的な処遇を意識的に施していた。

ここまで、医療施設と医療従事者の数を確認するとともに、移民部落の衛生医療施設を確認した。それでは、朝鮮人満洲移民の健康又は、医療施設の運営はどうだったのか。1942年に朝鮮総督府が組織した満洲朝鮮人移民部落衛生巡回視察団の視察報告から移民部落の朝鮮人の健康を確認してみよう。

朝、顔洗う水を汲んで来た。手がしびれるような水や泥水であった。開拓民が一番大変することの一つは飲用水であった。このような泥水を沸わして、飲むことであった。[中略]現在、北満洲は雨季に入ってからそれぞれ雨が降る故にもっと衛生上良くないので、赤痢が発生してお

64) 『満洲開拓年鑑 昭和十六年版』満洲国通信社、1941年、236頁

65) 同上

66) 『満洲開拓年鑑 昭和十七年版』満洲国通信社、1942年、72頁

り、独特の満洲[ジープス]も流行しており、雨季が終わって涼しい時期になると腸室扶斯が流行するという。[中略]開拓民を診察した結果、住民の7割は胃腸病であった。[中略]我々が残念に思うのは薬品が不足しているため、住民の要求を満たせないし、将来必要なのは医療施設であった。[中略]現在、500戸約1800人になった開拓村で「平壤医専」[平壤医学専門学校]出身の公医が一人いるが、材料不足でどうしようもないようであった⁶⁷⁾。

この記事では満洲朝鮮人移民部落医療巡回団は「忠慶開拓団」の朝鮮人移民を治療しており、そのなかで胃腸病にかかった人数が70%いることが確認できる。診療報告によると胃腸病を患った移民のほか呼吸病、心臓病、耳病があった。医療団は報告では、1800人で構成された朝鮮人移民部落で公医1人しかおらず、医療設備も不足している現状を指摘した。このような医師不足の状況は、先の引用文の朝鮮人部落の医療施設を検討した結果と同様であり、朝鮮人部落の貧しい医療施設の現状がより一層証明できる。

朝鮮人移民部落の医療不足と共に、朝鮮人移民部落の健康状態も良好ではなかった。医療団の現地報告によると、「胃病の原因は第一に水質の問題、第二に食糧の質の問題である」と指摘した⁶⁸⁾。朝鮮人移民の70%がかかった胃腸病の原因は水質関係と食糧の質の問題であることが確認できる。医療団は、「この住民は衛生知識が希薄で、幼児に冷水を沸かさず飲ませるのは一行を情けないと思った⁶⁹⁾と朝鮮人移民の衛生知識が希薄だと指摘した。しかし、同じ現地報告の別の内容を確認すると朝鮮人部落では水を煮沸して飲んでいたことも確認できる⁷⁰⁾。水の飲み方は現段階で判断できないが、ここで注目したいのは、朝鮮人移民部落で使われる水が泥水だということだった。朝鮮人移民部落の上水道施設が設置されていなかったと判断できる。そのため、このような泥水は沸かしても沸かさなくても、泥水を飲むことが朝鮮人移民の胃腸病の主な原因だと推測できる。朝鮮人移民部落の上水道などの施設の不備が原因で、部落の衛生状況が劣悪な状態となっていたことが指摘されよう。さらに、このような病気を治療するための医療施設と医薬品も不足している状況であったことは確認してきた。

朝鮮人移民の疾病原因としてはもうひとつ食糧の質の問題もあった。1941年から、「満洲国」は食糧収奪を目的として食糧供給制度を実施した⁷¹⁾。朝鮮人移民は米を生産していた

67) 「満洲建設奉仕朝鮮学生隊現地報告【一】」『毎日新報』1941年7月26日付

68) 「満洲建設奉仕朝鮮学生隊現地報告【四】」『毎日新報』1941年8月4日付

69) 同上

70) 「満洲建設奉仕朝鮮学生隊現地報告【一】」『毎日新報』1941年7月26日付

71) 前掲「満洲国」時期農産物価格変化および農業生産に対する影響」96頁

が、「満洲国」政府では米をすべて安格で強制買収し、粟、トウモロコシ、高粱などの雑穀を朝鮮人移民に供給した。供給規定によると、農村の場合、1ヶ月に成人は6.5キロで子供は5.1キロの食糧を供給すると規定した⁷²⁾。1ヶ月6.5キロの食糧を日当で計算すると、一日の食糧は200グラム程度であった。200グラムは全部米供給する場合、カロリーで計算すると約700カロリーである。成人1人1日当たりの必要な熱量は2,000カロリーの標準を考えれば、日当200グラムの食糧は全く不足していたのである。このような食糧の質と量が不足する状態の下、朝鮮人移民の疾病率が高くなった。朝鮮人未成年の疾病や栄養不良が多かった。

言うまでもなく、朝鮮人移民部落において栄養失調に陥っていたのは成人だけでない。1943年満洲朝鮮人移民部落の医療巡回団の記事から「我等の眼に特に強く感じた事は發育不良の所謂栄養不良児の多い事であった。手足が瘠せ衰え、頭だけ大きくて力ない眼を見張ており、見るからに憐れな小児達である」とされている。朝鮮人移民のなかで、栄養失調の未成年者が多かった。栄養不足を原因とする未成年者を含める朝鮮人移民部落の疾病率は高い割合であったと判断できる。

それでは同時期の日本人移民部落の衛生を見てみよう。特に同じ北満洲地域に移住する日本人移民部落の胃腸病疾病率はどうだったかを確認してみよう。

<表3-5> 日本人移民部落胃腸病疾病率統計表

部落名	人口数	胃腸病人数	統計時間
湯原福島村	604	177	1939年度
北五道岡	937	190	1942年度
大青川	437	147	1941年度
煙筒山	721	22	1942年1月
朝暘山	407	18	1941年2-5月

出典：「開拓地の保健状況」『植民地社会事業関係資料集「満洲・満洲国」編38；「満洲国」の部2』1942年6月、満洲移住協会、より作成。

<表3-5>に示すように日本人移民部落の年間胃腸病疾病率はほぼ20%–30%であった。朝鮮人移民部落の7割の胃腸病疾病率とは異なっていたことが確認できる。このような差異がある原因としては、日本人移民部落の衛生環境が朝鮮人部落に比して相対的に良好であったのではないかと思われる。その他、日本人移民の医療施設の数には、朝鮮人移民の4倍程度

72) 同上、98頁

であった。十分な医療施設と医師は日本人移民部落の疾病率が低い重要な原因の一つだと判断できる。

これまで、朝鮮人移民部落の医療施設と衛生状況を見てきた。その結果を論じると次のようになる。

朝鮮人移民部落と日本人移民部落の差が明確であっただけではなく、朝鮮総督府の移民宣伝内容の一つである「満洲開拓地の衛生状況が良い」という宣伝内容が誇大的なものであったことが確認できた。1941年、鮮満拓殖株式会社と満洲拓殖公社の合併により、朝鮮人移民と日本人移民の待遇が同じであることが明確になったが、医療衛生の部分では日本人移民の実際の待遇が朝鮮人移民より優遇されていたことが確認できた。日本人移民部落と朝鮮人移民部落の病院施設、医者などの比較を通じて朝鮮人移民部落の貧弱な衛生施設が確認できた。そして、朝鮮人移住部落の上水道などの生活施設不足や食料不足により発生した高い疾病率を明確にした。一方、日本人移民部落には十分な医療施設と医者がいて、疾病率は朝鮮人移民の4分の1程度であった。このような劣悪な衛生的生活環境から見ると、朝鮮総督府の「衛生的で豊かな生活」は誇大宣伝と判断できる。結局、誇大宣伝を信じて満洲へ移住した朝鮮人移民は、日本人移民と比較すると衛生保健の面で差別的な対応を受けていたといえる。

では、満洲移民朝鮮人の高い疾病率と栄養不足は何を意味するのだろうか。日本は朝鮮地域を通じた大陸進出の始まりで「満洲国」を建設し、大陸への拡張を続けていくと、持続的な戦時体制を構築していった。日中戦争が始まった後、戦争を続けるため、「食糧確保」などの政策を遂行した。このような戦時体制を支えるため、軍事物資の生産及び普及に力を注いでいた。日本政府、朝鮮総督府、「満洲国」政府および関東軍は軍事物資を生産するための労働力について重要性を認識しており、満洲地域の朝鮮人移民も軍事物資を生産するための労働力の一端を担っていた。これは満洲地域に実施された「産米増産計画」からも分かるように、満洲地域で生産された食糧を軍事物資として調達するためであった。このような計画から満洲地域の朝鮮人移民の労働力は重要視されたのである。しかし、彼らの計画とは違い、朝鮮人移民の実際の生活環境は劣悪であり、日本が重視していた戦時の労働力の重要性とは名ばかりで排除という要素だけが存在した。結局、自らの大陸拡張の目的と戦時体制に備えるため、朝鮮の労働力を偽りで満洲に移住させ、戦時体制における軍事物資の補給のための労働力を重視したにもかかわらず、満洲地域の朝鮮人移民の待遇は差別的な対応であったのである。

4. おわりに

まず、本論文の結論を提出する前、<表4>のように、朝鮮人移民宣伝の内容と満洲移住地域の実際状況の差異を整理する。<表4>から見ると、朝鮮総督府の宣伝が「過大宣伝」であることを確認できる。

<表4> 宣伝内容と実際状況の差異

	宣伝内容	実状況
耕地面積	1戸あたり10町歩	2-3町歩
移住貸付金	貸付金の利子を5-6分まで下げる	利子は1.58割
医療施設と勤務人員	一つの部落に公医一名を設置	3つの部落あたり1人
医療補助金	200戸当たり17,040円	なし

本稿の課題は、朝鮮における過剰農村人口問題の解消と満洲における食糧の増産を目的として進行した朝鮮人満洲移民政策について検討することであった。具体的に述べるならば、移民政策の一環である移民宣伝の過程や宣伝内容の真偽、そして移民計画によって現れた問題点と解決策を考察した。

第1に、1939年から朝鮮総督府は本格的な朝鮮人満洲移民活動を実施した。朝鮮総督府が朝鮮人満洲移民の人数を決定し、それに従って朝鮮南部の各道に分配し、各道の道庁社会課と農政課は朝鮮人満洲移民関連会議を開いて、郡・面にまで移民募集業務を分配している非常に体系的な宣伝と移民募集の推進が行われていた。しかし、朝鮮内農村の労働力不足が問題視され、移民の募集は計画通りに進行しなかった。募集が困難になった原因は、朝鮮農民と移民業務の担当者らの満洲地域に対する認識が良好ではなかったためでもあった。朝鮮総督府は満洲地域に対する認識を改めるため、優先的に座談会を開催し、劣悪な状況とは相反する内容を宣伝し始めた。具体的な内容としては、満洲内の移民の暮らしを紹介し、講演会や座談会などを開催して移民に対する「良い満洲像」を積極的に強調し始めた。朝鮮内農村の労働力がさらに不足していく状況のなか、朝鮮総督府は推進活動を活発に進めたのである。

第2に、朝鮮内で宣伝された在満朝鮮人の「生活」と、実際の生活状況には乖離が存在していたということも確認できた。

まず、朝鮮人移民の農業状況について、朝鮮総督府は「1戸10町歩、日本人移民と同じ条件で移住」という内容で移民宣伝を推進したが、移民した後の実際状況は水田2-3町歩で

あった。そして、朝鮮人移民の農作収入を確認すると、鮮満拓殖から貸出金の利子として 184.07 円を取られていた。すなわち、朝鮮人満洲移民は日本人移民より耕地面積が少ない状況で、収入もほぼ鮮満拓殖に強制的に搾取されていたのである。

次に、移住地の衛生医療の状況について、日本人移住地域と朝鮮人移住地域を比較すると、朝鮮人満洲移住地域における医者的人数は日本人移民のそれに比べ3割ほどにしかならなかった。医療施設の不足に加えて、朝鮮人移民地域では食糧不足問題も発生して、朝鮮人満洲移民中の7割が病気を罹患していた。

これらを踏まえて、朝鮮人満洲移民活動の宣伝と移民した後の実生活を比較し、移住生活と密接な関係がある耕地面積、農作収入、医療衛生状況において宣伝とは大きな懸隔があったことが確認できた。朝鮮人農民は朝鮮総督府の移民宣伝を通じて、満洲地域に移住したか、鮮満拓殖の小作農として収奪され、生活は窮乏の一途を辿った。これは、朝鮮総督府の移民宣伝が「過大宣伝」であり、差別的な対応であったことを示している。朝鮮人満洲移民は、宣伝とは違い鮮満拓殖の小作農になって、朝鮮総督府、「満洲国」、鮮満拓殖に収奪されたのである。

以上のように、朝鮮総督府の移民政策は、日本帝国内の労働力再配置の一環として、朝鮮農村における労働力収奪として性格を持っていたということが本研究の中で明らかとなった。

【参考文献】

<定期刊行物>

『毎日新報』、『満鮮日報』、『釜山日報』、『東方新聞』

<雑誌と年鑑>

『朝鮮』、『朝鮮経済年報・昭和14年版』、『満洲開拓年鑑・康徳八年』、『満洲開拓月報』、『時事年鑑・昭和14年版』、『満洲開拓年鑑 昭和16年版』、『民生年鑑』、『満洲開拓年鑑 昭和17年版』

<デジタルアーカイブズ>

アジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/>

韓国史データベース「朝鮮総督府職員録資料」<http://db.history.go.kr>

<大韓民国国家記録院所蔵史料>

「開拓民事務の件」、朝鮮移住協会、1941年、韓国国家記録院所蔵、CJA0019848

「満洲開拓民講演集」、朝鮮移住協会、1941年、韓国国家記録院所蔵、CJA0002508

「総督官房外事部功績事項」朝鮮総督府、1942年、韓国国家記録院所蔵、CJA0002370

「外事部機構変遷の経緯に関する件」朝鮮総督府、1942年、韓国国家記録院所蔵、CJA0002370

<国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵史料>

「朝鮮人移住対策ノ件」、日本内閣、1934年、国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、A03023591400

「在満朝鮮人指導要綱」、関東軍、1936年、国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、C01003180100

「在満朝鮮人指導要綱(修正)並鮮農取扱要綱に関する件」、関東軍、1938年、国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、C01003367300

<韓国語文献>

クァク・キュファン キム・ヘリム(2018)「満洲国時期日本の女性動員と満洲移民」『満洲研究』25

柳喨久(2016)「1930年代中後半日帝の満洲開拓移民政策に対する親日在満韓人の宣伝」『韓国学論叢』45

鄭安起(2011)「満洲国期朝鮮人の満洲移民と鮮満拓殖」『東北亜歴史農村』31

趙廷祐(2014)「朝鮮総督府満洲移民政策の裏面—鮮満拓殖会社の設立経緯を中心に」『社会と歴史』103

玄奎煥(1967)『韓国流移民史 上』語文閣

<日本語文献>

蘭信三(1994)『「満洲移民」の歴史社会学』行路社

金永哲(2012)『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂

権哲男(2013)「満洲国」時期農産物価格変化および農業生産に対する影響」『東京経大会誌』第279号

小都晶子(2006)「日本人移民政策と満洲国政府の制度的対応—拓政司、開拓総局の設置を中心に」『アジア経済』47(4)、日本貿易振興機構アジア経済研究所

小都晶子(2017)「満洲国立開拓研究所の調査と研究」『アジア経済』58(1)、日本貿易振興機構アジア経済研究所

松田澄子(2018)「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』45

玉真之介(1996)「「満洲移民」から「満蒙開拓」へ—日中戦争開始後の日満農政一体化について—」『弘前大学経済研究』第19号

中国朝鮮族青年学会編(1998)『聞き書き 中国朝鮮族生活誌』社会評論社

杉山春(1996)『満洲女塾』新潮社

朴敬玉(2015)『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶ノ水書房

朴仁哲「朝鮮人(2015)「満洲」移民のライフヒストリー(生活史)に関する研究：移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに」北海道大学、博士論文

依田憲家(1976)「満洲における朝鮮人移民」『日本帝国主義下の満洲移民』満洲移民史研究会

<中国語文献>

衣保中(1999)『朝鮮移民と東北地域の水田開発』長春出版社

孫春日(2000)『解放前東北朝鮮族土地関係史研究』吉林人民出版社(長春)

金穎(2007)『近代東北地域水田農業発展史研究』中国社会科学出版社

孫春日(2009)『中国朝鮮族移民史』中華書局(北京)

논문투고일 : 2021년 12월 30일

심사개시일 : 2022년 01월 16일

1차 수정일 : 2022년 02월 09일

2차 수정일 : 2022년 02월 18일

게재확정일 : 2022년 02월 22일

 <要旨>

アジア太平洋戦争期朝鮮総督府における満洲移民宣伝活動

権力

本稿の目的は、アジア太平洋戦争期日本の労働力再配置という背景の中で、朝鮮の農村人口問題と「満洲国」からの食糧増産を目的として進行した朝鮮人満洲移民政策を検討する。詳しくは、この政策の一環である移民宣伝の過程や宣伝内容の真偽、そして移民計画によって現れた問題点と解決策を考察することである。

朝鮮総督府は満洲地域に対する認識を改めるため、満洲内の移民の暮らしを紹介し、講演会や座談会などを開催して移民に対する「良い満洲像」を積極的に強調し始めた。また、朝鮮人満洲移民活動の宣伝と移民した後の実生活を比較し、移住生活と密接な関係がある耕地面積、農作収入、医療衛生状況において宣伝とは大きな懸隔があったことが確認できた。朝鮮人農民は朝鮮総督府の移民宣伝を通じて、満洲地域に移住したが、鮮満拓殖の小作農として収奪され、生活は窮乏の一途を辿った。これは、朝鮮総督府の移民宣伝が「過大宣伝」であり、差別的な対応であったことを示している。

以上のように、朝鮮総督府の移民政策は、日本帝国内の労働力再配置の一環として、朝鮮農村における労働力収奪として性格を持っていたということが本研究の中で明らかとなった。

 Manchurian immigration Propaganda activities at the Government
 - General of Chosen during the Asia Pacific War -

Quan, Li

The purpose of this paper is to discuss the Korean immigration policy of Manchuria, which was promoted with the aim of increasing the production of food from “Manchukuo” and the rural population problem of Korea in the background of the relocation of Japan’s labor force during the Asia Pacific War. In detail, we will consider the process of immigration promotion that is part of this policy, the truth of the content of the promotion, and the problems and solutions that have emerged from the immigration plan.

The Government-General of Chosen has begun to actively emphasize the “good image of Manchuria” for immigrants by introducing the lives of immigrants in Manchuria and holding lectures and roundtable discussions in order to change their awareness of the Manchurian region. In addition, by comparing the propaganda of Korean Manchurian immigrant activities with the real life after immigration, it can be confirmed that there is a big difference from propaganda in terms of cultivated land area, agricultural income, and medical hygiene. Korean farmers moved to Manchuria through immigration propaganda by the Government-General of Chosen were deprived of their livelihoods as the tenant farmer of SenMan Development Company and their lives continued to be poor. This shows that the immigration promotion of the Government-General of Chosen was “over-promotion” and was a discriminatory response.

As mentioned above, it was clarified in this study that the immigration policy of the Government-General of Chosen had a character as a labor plunder in rural Korea as part of the labor relocation within the Japanese.